

大阪工業大学工学部 学生員 ○小澤 尚志
 大阪工業大学工学部 学生員 葉山 学
 大阪工業大学工学部 学生員 安井 友紀
 大阪工業大学工学部 正会員 岩崎 義一

1. はじめに

(1) 研究の目的と背景

大阪市では大阪市制100周年記念事業の一環として「テクノポート大阪」計画を策定し、現在もなお推進している。この計画は、新時代の大阪を創造していくために咲州・舞州・夢洲の約775haの埋立地に、情報通信・先端技術開発・国際交易の3つの機能を中核に集積し、さらに文化・レクリエーション・居住機能をあわせもつ新しいまちを建設しようとする計画である。このうち咲州の南港ポートタウンは、当初産業系用地であったものを居住ゾーンとして計画変更され、昭和50年代前半から入居が始まり現在人口は約3万人（世帯数約1万世帯）である。「テクノポート大阪」計画はさらに居住ゾーンの拡大をはかり、夢洲において約6万人の居住ゾーンが予定されている。

このような急激に新住々民が移転居住することによって形成された新都市は、既往研究でも指摘されているように^{1) 2)} 歴史的に形成されてきた既存市街地よりも生活環境やコミュニティ形成が不十分であり、利便性の高いうるおいのある生活環境整備が課題になっていると考えられる。

よって本研究では、南港ポートタウンにおける居住者の住まいへの感想や社会参加の実態を調査し、コミュニティ及び今後の課題を考察することを目的とする。

(2) 研究の方法

南港ポートタウンに居住する住民を対象として、アンケートによる実態調査（調査期間1999年12月5日～12日）を行い居住者の住まいに対する意識、生活意識構造の分析を行った。

2. 住まいに対する意識

住まいに対する意識の基本特性としては、図2-1のように「家の日当たり」や「周囲景観」はやや満足し、「居住スペース」についてはやや不満となっている。また、交通の利便性については不満が多く、かなり交通が不便といえる。年齢別特性としては、図2-2のように30～40歳代の多くが「家の日当たり」、「居住スペース」にやや不満を持っている一方、50歳代以上はやや満足という回答が得られ、年代別に住まいの意識の違いがみられる。

3. 居住者の生活意識調査

(1) 定住の意向

ポートタウンに転居する前の居住区としては、大阪市内がほとんどであり、うち約半数以上はポートタウンに近い住之江区、大正区、港区、西成区の湾岸4区であった。転居前の地域を年齢別にみたのが図3-1である。30～50歳代は住之江区よりも大阪市内から転居してきた人が多く、60歳以上は、反対に大阪

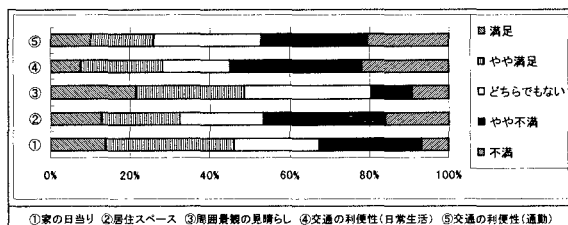


図2-1 住まいに対する満足度

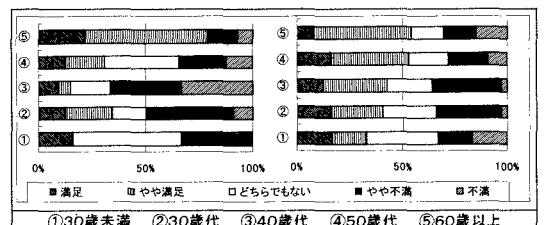
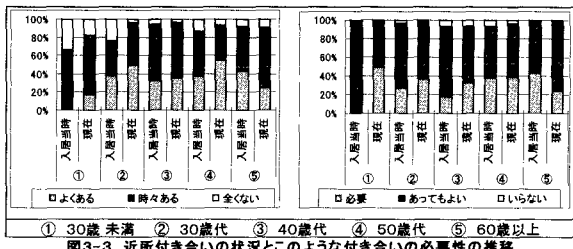
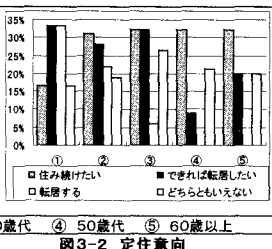
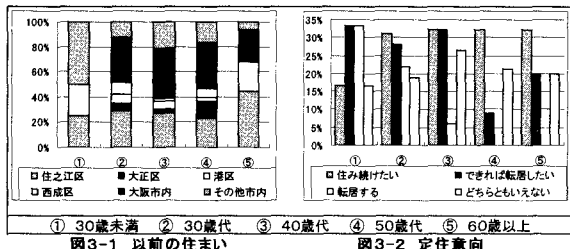


図2-2 居住スペースと家の日当たりに対する満足度



住について、年齢別と転居前の居住区分にみると大阪市内から転居してきた30～40歳代は、定住意向が低く、また50歳代以上の層は定住意向が高かった。住之江区から転居してきた60歳代以上も同様である。

(2) 近所付き合いの実態

図3-3のように近所付き合いの状況について年代別にみると30歳未満～50歳代は入居当時よりも現在のほうが若干高まる傾向にあるのに対し、60歳以上は入居当時よりも現在の方が若干低くなる傾向にある。これまでの付き合いについては全体的に必要性の意識が高まる傾向にあるが、60歳以上は付き合いの状況と同様に意識が低くなる傾向にある。

(3) 転居理由

転居したいとする理由をみると「一戸建てがほしい」「持ち家・マンションに住みたい」及び「居住スペースが狭い」といった居住に関する理由が多く、次いで「交通の便が悪い」、「総合病院がない」といった日常生活に関する理由がみられた。このほか「買い物施設の不足」、「自然が少ない」となっている。つまり、持ち家志向と生活利便の向上が主な要因となっている。(表3-1)

表3-1 転居したいとする理由(聞き取り調査)		
分野	転居の理由	件
居住	一戸建てがほしい、持ち家・マンションに住みたい	11
	居住スペースが狭い	7
交通	交通の便が悪い、ポータライナーの値段が高い	7
	医療機関 総合病院がない	7
施設	買い物施設が充実していない	2
	自然 もっと自然が多いところで生活したい	3
その他		10

(4) 定住意向別居住者像

ここに「住み続けたい」と思っている人のほとんどは住まいの要目に概ね満足しており、「転居する」と思っている人のほとんどはこれに不満とする意識が強い傾向がみられ、日常生活における交通、通勤といった交通条件においては、両者とも不満とする意識が強く「転居する」と思っている人の方がより強い意識が見られる。また、付き合いの面からみると、全体的に「住み続けたい」と思う人よりも「転居する」と思う人のほうが、その必要性の意識が低い傾向がみられる。(表3-2)

表3-2 定住意向別住まい、交通、付き合いの特性				
		住み続けたい	転居する	
住まい	家の日当たり	満足 △	不満 ○	
	家の風通し	〃 ○	〃 ○	
	居住スペース	〃 △	〃 ◎	
	周囲景観の見晴らし	〃 ○	〃 ○	
交通	交通の利便性 (日常生活)	〃 ..	〃 ◎	
	〃 (通勤)	〃 ..	〃 ◎	
付き合い	付き合いの状況 入居当時	ある ◎	〃 △	
	〃 現在	〃 ◎	〃 ○	
	そのような付き合い 入居当時	必要 ◎	必要 ○	
	〃 現在	〃 ◎	〃 ○	

...:20～40%、△:40～60%、○:60～80%、◎:80～100%

4. まとめ 以上をまとめると

- ① 一般的に都市のコミュニティが不足する問題が指摘されるなかで、急成長をみた南港ポートタウンにおいては一定のコミュニティは存在することから、さらにこれを土台にコミュニティの強化、拡充を図ることが期待される。
- ② 今後、転居を展望できない高齢者を中心に定住意向が高いため南港ポートタウンには、戸建て住宅の供給など若者定着のための魅力ある開発が必要であり、あわせて高齢者定住のための環境整備も課題である。
- ③ 定住環境向上のため、住民生活に根ざした住宅環境の整備、生活利便施設の充実、交通網の発達、地域コミュニティの醸成などに向けた研究を早急に進める必要がある。

参考文献

- 1) 岡・鳴海・田端・宮田：大阪市臨海部の土地利用転換および居住構造変化の動向に関する研究、日本都市計画学会学術研究論文集 No.129 (p.769～774) 1998年
- 2) 竹野・石田・森谷：都市社会型コミュニティの形成に資する施設環境整備のあり方に関する基礎的研究、土木計画学研究・講演集 No.22 (2) p.331～334、1999年